『雛形春日山』

文化学園服飾博物館学芸室室長　植木　淑子

『雛形春日山』は、明和5年（1768）に発刊されたきものの模様集である。江戸時代の寛文（1661-73）から文政（1818-30）頃にかけて、約180種のきものの模様集が刊行されたことが知られ、ここに紹介する『雛形春日山』もその1種である。

江戸時代のきものの模様集は、小袖雛形、模様雛形あるいは雛形本などと呼ばれ、ほとんどは木版による黒の1色摺りで、半紙を二つに折り、袋綴じとした体裁である。模様図は1頁に1図が掲載され、きものの形を線で表し、その中に模様が描かれている。そして、余白の部分に模様の題名、地色、染織技法などが記されている場合が多い。模様図の収録数は、それぞれの雛形本によって多少の違いが見られるが、およそ100図前後である。雛形本は主に町方の人々が見て楽しむ絵本的な性格を持ち、初期においてはその傾向が強かったと考えられている。また、呉服店ではきものの注文を取る際の見本帳とされ、今日のファッション·ブックのように流行をリードする役割を果たしていた。このため、現存する江戸時代のきものの中には、雛形本の模様ときわめて類似するものも見受けられる。

『雛形春日山』は上中下の3巻からなり、94の模様図が収録されている。刊記によれば、版元は大阪の柏原屋清右衛門と京都の菊屋喜兵衛、作者は三文字屋弥四郎である。三文字屋弥四郎は、京都の模様絵師であり、『雛形千歳草』『雛形井関川』『伊達紋鏡』なども手がけ、18世紀半ばに活躍したことが知られている。なお、『雛形春日山』の題名は、様々なきものの模様図を奈良·春日山の四季折々の風景になぞらえたものであることが序文に記されている。

まず、模様配置に着目すると、きもの全体に配置する総模様、腰から下に配置する腰模様、裾を中心に配置する褄模様が見られる。この中の褄模様は18世紀前半から新たに行われるようになった模様配置であり、『雛形春日山』には13図が認められる。これは全体の2割にも満たない数であるが、「江戸褄」、「総江戸褄」、「下褄」あるいは「褄下」の3種が描き分けられている。模様図によれば、「江戸褄」は襟先から褄にかけて模様を配置し、この模様と関係のあるモティーフを伊達紋（装飾を目的とするおしゃれ紋）とする。例をあげると、「から紅」と題された模様図（図1）は、襟先から褄にかけて流水と紅葉を表し、武官の冠と弓矢を取り合わせた模様を伊達紋とする。これは『古今和歌集』*の「ちはやぶる神世もきかず龍田河　韓紅に水くくるとは」にちなみ、伊達紋の冠と弓矢は、この歌を詠んだ在原業平の武官の姿を象徴している。また、「総江戸褄」（図2）は、襟先から褄にかけて模様を配置するが、伊達紋を付け

図1　江戸褄「から紅」

図2　総江戸褄「野馬」

ず、褄模様と関連する小さなモティーフをきもの全体に表す。さらに、「下褄」あるいは「褄下」（図3）は、前後の裾の低い位置に模様を配置し、この模様と関連するモティーフを伊達紋とする。3種の褄模様の中で、「総江戸褄」は『雛形春日山』のみに見られる模様配置である。

模様の題材は、花･草･木･鳥･獣･風景･器物･文芸や故事にちなむものなど多くが取り上げられている。これらは様々にデザインされているが、小ぶりな模様として構成し、きもの全体や腰下に散らすように配置する形式が多く見られる（図4）。『雛形春日山』で注目されるのは、茶道で用いる名物（めいぶつ）裂（ぎれ）をデザインソースとしている模様である。

「南天更紗」と名づけられた模様は、南天をインド更紗の小花模様のように構成している（図5）。また、「嵯峨切」という名の模様は、「嵯峨切」そのものが名物裂の名称であり、この裂に織り出される桐の葉と入子菱を組み合わせた模様を描いている（図6）。名物裂は中国をはじめ、インドや東南アジアの島々から舶載された染織品であり、これをきものの模様としたところが斬新である。

きものの地色については、青系と茶系がほぼ同数あり、これらの色が全体の半数を占める。青系では花色、千種（ちくさ）、あさぎ、ききょうなど、茶系では御（お）納戸（なんど）茶、こび茶、鶯茶、せんざい茶などが見られ、同じ系統の色であってもいくつかの色が使い分けられている。この他には、黒、けんぼう、ねずみ、紅、紫、藤色なども見られる。

染織技法については、白上げに刺繍や色挿しを加えるものが7割以上に及ぶ。白上げとは、糊防染により地色を白く染め残して模様を表す染色技法である。すっきりとした印象があり、18世紀半ば頃より多用されるようになった。この他には、刺繍のみで模様を表す素縫いが1割ほど、友禅染、墨絵、茶屋染などがわずかに見られる。

雛形本はそれぞれの刊行当時のきものの流行を如実に示すものであり、『雛形春日山』にも、18世紀半ばから後半にかけての様子が示されている。それは、裾を中心に模様を配置する褄模様や、小ぶりな模様を散らす形式、青や茶の系統の地色を多用すること、多くは白上げに刺繍や色挿しを加える模様表現などである。これらは繊細さや渋さを好む美意識によるもので、江戸時代後期の町人による独自の文化が形成されつつあった時代が反映されている。なお、当館所蔵の『雛形春日山』には、上巻と中巻の表紙見返し、下巻の裏表紙見返しに「福光寺新町　川合田屋忠七郎」の署名がある。また、一部に彩色が加えられ、呉服屋が所有し、実用に供されたものと考えられる。

*小松正夫･前田成穂 校注訳『古今和歌集』（新編日本古典文学全集11）小学館 1994〈918/S/11〉

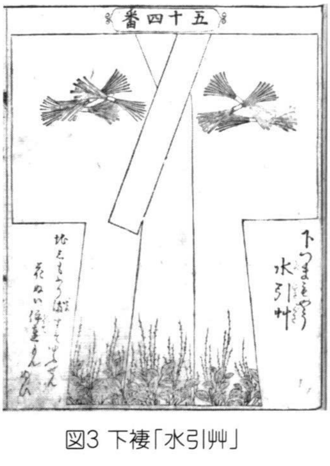

図3 下褄「水引艸」

図4「笹波」

図5「南天更紗」

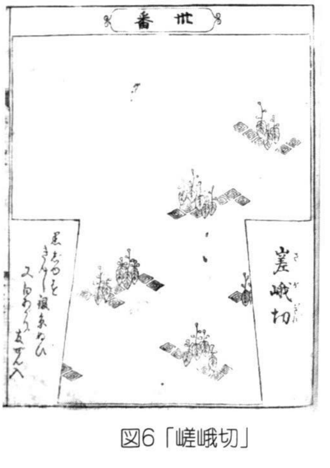

図6「嵯峨切」